犀川バス慰霊式にあたって

今年も、１月２８日がめぐってきました。学生２２人、体育教員１人、バス乗務員２人、合計２５人もの尊い命が失われた犀川バス事故から２９年目の冬です。

毎年のことですが、この時期は大寒にあたり、一年で一番寒い季節です。１９８５年１月２８日の現地は、一面雪に覆われ、ダム湖周辺の湖面が氷結する寒さでした。その後毎年現地慰霊祭が執り行われていますが、どの年も、凍てつくような寒さに声が震えます。今年も現地では、静かに湖面を思う時間が過ぎていることと思います。

成人になる前後の年に、大切に育てた我が子を突然失う苦しみは、何年たっても癒されるものではありません。ご遺族の悲しみは今も続きます。しかし、２９年の歳月は、ご遺族を高齢化させ、その悲しみを毎年共有し続けることも、だんだん困難になっています。私たちは、慰霊碑に書かれているように、「悲しみを二度とあらしめぬために」、ご遺族の悲しみに深く思いを寄せて、これからも合掌を続けてまいりたいと思います。

事故から２９年の間に、日本福祉大学は６学部を有する「ふくしの総合大学」に成長してきました。そして、いのちの尊さは、「ふくし」の原点です。いのちがあってこそ、「くらし」も「いきがい」も意味を持つのです。日本福祉大学は悲惨な事故を二度と繰り返さないために、全学をあげて「危機管理」に取り組み、毎年１０月の第３木曜日を「安全の日」に定めています。昨年の安全の日には大学と美浜町が共催して、学生・教職員、家主組合の皆さまを中心とする地元住民が参加する防災訓練を初めて行いました。このような活動は、今後も、日本福祉大学が存続する限り、続けてまいります。

最後に触れておきたいことは、バスを運行していた三重交通が、事故から２９年を経過した今も、社をあげて慰霊の時間を共有していただいていることです。雪深い現地でご遺族が怪我をしないように、社員が前日から現地に赴き雪を溶かし、道をつくる等、安全確認に努めていただいています。

その気持ちも大切にしつつ、今年もみなさんと合掌をしたいと思います。そして、入学式の頃には、亡くなった２２人の学生と体育教員１人の魂が宿った「友愛の桜」が見事な花を咲かせるように願いたいと思います。

２０１４年1月２８日

日本福祉大学学長

二木　立